

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第 184 号

白井義胤翁
を訪ねて 6

挑戦はなお続く

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

上流社会への作戦計画

古美術商として財を成した義胤翁は、商人として財を積み上げるだけでは、決して上流階級の人々に評価されるものではないという事実にも気付いていました。頼朝公の房総半島での旗揚げに付き従った有力関東武者千葉氏に連なる名門白井家の再興を託された義胤翁は、いかにして上流階級の仲間入りを果たすかを真剣に考えたのです。

高い教育を受けることが出来なかった義胤翁は、寸暇を惜しんでは出入りの元名門武家や元公家といった華族身分を有する人々との会話を参考に、様々な書物を読み漁りました。そんな翁が最も感銘を受けたのが、産業革命の先頭を走り、世界の工場との評判得た、イギリスの産業資本家たちのジェントルマンへの転身の過程でした。当時のイギリスでは、「三代目はジェントルマン」と言われたのです。初代は勤勉で身を立て、利益を次々に再投資に充て経営を大きくする。息子には職業教育を施し、最新の技術を学ばせるが、パブリックスクールからオックスブリッジへ進むエリート教育を受けさせるわけではない。そのため 2 代目は地方では指折りの資産家になり、零落した貴族などから所領を買い取る形で地主への道を進むのですが、なお上流階級の仲間入りは出来ないのです。しかし仲間入りできない理由が学歴にあることを承知している 2 代目は、息子たちには、早くから優秀な家庭教師をつけて特訓し、イートン、ハーレー、ラグビーなどの全寮制のパブリックスクールに入学させるのです。こうして 3 代目は、厳しい寮生活を共に耐えた仲間として、名門の貴族やジェントルマンの息子たちとオレおまへの付き合いをして大人になるのです。父から広大な農地を受け継ぎ、地代収入で悠々と生活する三代目は、押しも押されもしないジェントルマンとして遇されるのです。

幕末・維新の激動を経験した日本では、一代で爵位を得るような傑物も輩出されますが、彼らに共通する特徴は、いずれも苦学の末に高い教養を身につけていることでした。そんな事情も理解した義胤翁は、急がば回れとばかりに、イギリスの 3 代目作戦を踏襲して、まずは麻布笄町に敷地 3 千坪の大邸宅を構えると、近隣の私立学校へ少なからぬ寄付金を提供したり、苦学生へ無償の奨学金を提供するなど、資産の一部を活用することから始めたのです。中でも有名なのが自宅に近い麻布学園への多額の奨学資金の提供でした。そんな義胤翁の下に、柿生村の代表団が陳情に訪れたのは 1901(明治 34)年のことでした。1899(明治 32)年の改正学校令によって、必要な教室数を揃えた 4 年制の高等小学校校舎を建てる必要に迫られたのです。民家を改装して何とか高等柿岡小学校を新設したのですが、この建物は国と県の基準を満たさないと、新たに高等小学校の建設を迫られることになったのです。柿生村では、黒川、片平、上麻生、岡上、下麻生と 5 校もの尋常小学校を抱え、これ以上村民に負担を強いることが出来ない上に、乏しい農地をどこもこれ以上潰すなどできないと、学校敷地をめぐるでも村中が騒然となる事態を招き、

一時柿生村 3 代目の村長だった鈴木彦八氏以下村役人が総辞職する事態に陥ったのです。都築郡長の仲介で事態は回復し、村の代表団を下麻生出身の大富豪白井義胤氏を東京麻布の大邸宅に派遣して、村の窮状を訴え学校建築資金の支援を得ようとしたのです。代表団は義胤翁に快く迎え入れられ、話を聞いた義胤翁から、即決の形で、建築資金のみでなく設備備品の一切を賄ってなお余裕のある資金の提供を受けたのです。村では校地を現柿生中学校の校庭のある高台(農地ではない地)に定め、校舎に上がる階段の敷設工事の費用も、義胤氏の寄付で賄ったのでした。

義胤氏は、こうした教育機関への寄付を皮切りに、有り余る私財の一部を慈善事業に投じることで、世間の信頼を得ながら、孫の世代に結実させるべく、上流階級へ続く道のりの地ならしを始めたのです。

続 く



校舎正面、平面図

義胤高等小学校は、義務教育の 6 年生までの引き上げによって、1908(明治 41)年、尋常高等義胤小学校と改名した。図はその時期の平面図。

シリーズ

麻生区の地名 その9

片平の地名

菊地恒雄(日本地名研究所 研究員)

片平の地名は、永禄 2 年(1559)の『小田原衆所領役帳』に「小机片平郷」が初出で、当時は古沢村と五力田村を含む地域と考えられています。片平の地名由来は、「片側が傾斜の緩い平らな地形となっている所」といわれ、片平川低地をはさんで両側が台地となっており、北側は急な崖を形成し、反対に南側は緩やかな傾斜で次第に高まる形状になっていることから、カタヒラと呼ばれたと考えます。

正保年間(1644~48)の『武蔵田園簿』に「前場氏知行片平村 高 268 石内田方 168 石、畑方 100 石、外高 3 石 4 斗志光寺(修広寺)領」と載り、旗本前場氏が所領し、耕地の 5 分の 3 が水田であることがわかり、片平川・麻生川の水を有効に活用しています。享保元年(1716)に、支配替えがあり、旗本領から天領となり幕府の直轄地となりました。

風土記稿に載る小名「はつみ」は明治にも字葉積があり、片平 1 丁目の修広寺谷戸付近をいいます。葉積の意味はわかりません。麻生川の近くに、小名赤せきがあり、麻生川の水を片平村に引込む堰があったことによります。赤は山肌の色のことと考えます。

字日向は片平 2 丁目付近で、片平川の谷の北側の南斜面であるところからの名称です。修広寺付近を小名夏刈屋があり、修広寺の山号夏刈(菟)山はこれに由来します。夏刈については、2023 年 1 月号に書きましたので、参照してください。他に、柿生小学校の北側の斜面を小名天神かいとと呼ばれ、天神社が祀られた、カイトとは垣内とも書き、集落を意味します。天神社のある集落とも解釈されます。

字中村通は片平 5 丁目と 6 丁目の一部付近で、日蓮宗善正寺があります。中村は村の中央を意味します。通は通りに面した集落ということです。五力田境には五力田谷戸が片平川沿いには第六天社があった大六天谷戸があり、その高台を全明寺台といいます。全明寺は修広寺の末寺でしたが廃寺となり、そこに明治初期に片平学舎がありました。現在の柿生学園の場所です。

字吾妻は白鳥 1~3 丁目、栗平 1~2 丁目付近で、白鳥神社があり、その祭神の日本武尊に因む命名です。明治 44 年に村内の各社を合祀し、翌 45 年に五力田の六所社と諏訪社を合祀して、片平・五力田両村の総鎮守となりました。栗木境を亀井と呼び、栗木にも同じ小名があることから地続きの地であったことによる地名です。片平川沿いには片平 7・8 丁目の住居表示が施行されました。

字金井原は小名にかない原があり、片平川の南側の谷戸を金井原谷戸と呼びます。意味は伝えられていませんが、やや鉄分の多い水が流れていたことからの地名で、谷戸が奥まで続いているので原が付いたのかもしれませんが。片平川沿いは片平 8 丁目の住居表示が施行されました。

字富士塚は金井原の東隣で、町田市広袴と境を接しています。その高台に富士塚があったことに由来します。古墳時代末期の円墳、近世になってその上に浅間祠が祀られたところから富士塚と呼ばれるようになりました。富士塚の東半分は小名京法台、西半分が小名せき谷でその谷戸の台地が原台と呼ばれています。京法台は享保台とも記され、享保年間に開発されたともいわれています。

字仲町は片平 3~4 丁目付近で片平地区では最も早く開発されたところで、小名寺台があり修広寺が昔はこの地にあったと伝えられています。通称地名の猿田谷戸、柿の木谷戸やイトーピア住宅地など様々な地名が存在します。片平仲町遺跡公園は縄文時代の敷石遺構として注目されました。片平と上麻生の境の片平川沿いに熊野社がありましたが、明治 44 年に白鳥神社に合祀されました。

片平川には上流部から 5 つの堰があり、川の両側の低地に水を送っていました。その名は大堰、金井原堰、仲堰、仲町堰、熊野堰がありました。



シリーズ
歴史の中の女性像 1

ナイチンゲールの世界(1)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

はじめに

教育の歩みのシリーズで、女性が学ぶことの困難をいくつかの例と共に、記させていただきました。そうした困難にくじけそうになりながら、何とか踏ん張って厳しい道を踏み固めた女性たちについて、私が担当させていただいている『柿生文化』の 3 面のページで、断続的に記させていただこうと考えました。シリーズの最初に、皆様もご存知のナイチンゲール女史を取り上げます。彼女の看護師としての活動はよく知られていますが、その活動期間はごく短いものでした。看護師をやめた後の統計学者としての研究と実績が、現在では高く評価されています。そんなナイチンゲール女史も、母と姉の強い反対にあって、一時は自宅に軟禁状態にされ、現在でいううつ病の症状に悩まされた時期があるのです。そんな彼女の歩みをまずは記させていただきます。

生い立ちの記

フローレンス・ナイチンゲールは、1820 年 5 月、イタリアのフィレンツェで生まれました。1818 年生まれのヴィクトリア女王とは 2 歳違いです。フローレンスはフィレンツェの英語読みです。彼女の年子の姉はアーセノーブ、こちらはナポリで生まれたため、ナポリのギリシア語表記でアーセノーブと名付けられたのです。2 人の両親は、イギリスのジェントルマンの家計に属する大地主だったのです。父のウィリアムはケンブリッジ大学出の秀才で、学者肌の人物でした。母のファニーは父より 6 才上の姉さん女房で、社交好きで贅沢な浪費家でしたが、有り余る資産が揺らぐことはありませんでした。

ウィリアムとファニーは、1818 年に結婚するとすぐに欧州大陸にハネムーンと洒落ました。気に入った家が見つかるまでと、新郎が新婦を誘ったのです。ただこの旅行は、我々の考えるハネムーンとは大違いでした。何しろ 2 人が旅行中に生まれた 2 人の娘を連れてイギリスに帰ってきたのは、3 年後の 1821 年だったのです。

夫妻は 3 年間どのように過ごしていたのでしょうか。彼らは執事や女中頭、専属の料理人に御者、小間使いなど 10 人を超える使用人を伴っていたのです。旅先では、まず先導の召使が選んだホテルに落ち着き、その町が気に入ればしばらく滞在することにして、適当なアパルトマンや別荘を探して借り受けるのです。いわばしばしの別荘ライフを楽しみ、飽きると別の地に移動するのです。姉のパーセローブが生まれたナポリやフローレンスの生まれたフィレンツェは、夫妻が気に入り特に長く滞在した思い出の地だったのです。

3 年ぶりに帰国した両親は、イギリス中央部のダービシャーに新築した豪邸リー・ハースト荘に落ち着きます。しかしこの地は、夏は涼しくて快適なのですが、夏以外の季節を過ごすには不向きだったのです。そこで父は、母の意見も取り入れて、ロンドンにも近い東南部のハンプシャーにエンブリー荘というこれまた豪邸を購入したのです。われらがフローレンス・ナイチンゲールは、こうしたとんでもない大金持ち、爵位こそ持たないが王族や大貴族も集う、最上級の社交界に自由に出入りできる大地主(=ジェントルマン)家のご令嬢として、誕生したのです。姉妹は両親と共に夏はリー・ハースト荘に暮らし、冬はエンブリー荘ですごし、春と秋の社交の季節はロンドンで過ごすという生活を続けたのです。

1820 年生まれのフローレンスが少女時代を過ごした 19 世紀前半のイギリスは、産業革命期の後半、工場制度の普及期を迎えており、工場労働者の子どもたちを中心とした初等教育の普及期にあたっていました。1840 年当時、イギリスの識字率は 59% に達しており、隣国フランスの 47% を大きく上回っていたのです。今でいう小学校の普及率の違いが、識字率の違いに反映しているのですが、ナイチンゲール姉妹のような上流階級の子女は、小学校に通うのではなく、両親が選んでくれた家庭教師について、個人指導を受ける形で初歩の教育を受けたのです。

続く

ナイチンゲール家の母娘の肖像
右の子がフローレンス

第 88 回 カルチャーセミナー

幕末・明治初期の小笠原における国際関係

日時: 9月10日(日) 13時30分~15時30分

講師: 岩本陽児氏(和光大学現代人間学部教授)

会場: 柿生郷土史料館特別展示室

江戸時代、無人島だった小笠原諸島の存在など、ほとんど知られていませんでした。そんな日本が何故小笠原諸島を日本領に出来たのか、地名の由来と共に語っていただきます。

寺社の風景

菊理媛大神(くくりひめのおおかみ)のお言葉(後篇)

白山神社 禰宜 川島佑太

そして二つ目の神徳である「心むすび」は、日本書紀に見られる菊理媛大神(白山姫命)の行動に由来するものです。日本書紀には黄泉津比良坂における伊弉諾尊と伊弉冉尊の争いに対し、菊理媛大神がその仲を取り持ったと記されております。

菊理媛大神が何かを言って、伊弉諾尊がそれを褒めたとありますが、具体的に何を言ったのかは書かれておりません。それ以上の記載がない以上、何を考えたところで憶測の域を超えないのですが、長年白山神社に務めていて、ずっと気になっているところです。

当社の境内には、「祭神の白山姫命は歯を守る神様である」と書かれた看板が立っています。これは江戸時代中期に後桜町天皇が、白山神社の神箸と神塩によって歯痛を治めた話が由来です。「歯苦散(歯の苦しみを散らす)」の語呂合わせも広く知れ渡っております。実際、歯の治療のために遠方からご参拝される方も多くいらっしゃいます。

すでにいる神様に新たな御利益を見出す、それも語呂合わせによるものというのは、非常に日本人らしく面白いです。

歯を守る神様であると考え、菊理媛大神が日本書紀の中で「歯痛すら知らない伊弉諾尊がどうして、神産みの苦しみに死んだ伊弉冉尊を責められるものでしょうか」などと言ったとも、考えられます。

当社では今年から「白山歯守(はもり)」という、歯の健康のための御守りの授与を始めました。陶器製の御守りで、境内で製作し、御霊入れをしております。昨年、新たに社務所の管理に入られた方が陶芸に通じられていて、その縁で本御守りを授与することとなりました。

「水の力」を使った陶器の「白山歯守」が、新たな管理人様との「心むすび」により誕生いたしました。この御守りでますます、参拝される方々にご利益が授かりましたら幸いです。



元旦3ヶ日に開扉される拝殿

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日：9月10・24日(毎日曜日) 10月7・14・28日(毎土曜日)

◎開館時間：午前10時～午後3時

第21回特別展示 柿生隧道の建設

期間：8月12日(土)～12月16日(土)
会場：柿生郷土史料館特別展示室

かつて、真福寺から柿生中学校脇を通って上麻生に抜ける道には、柿生隧道と命名されたトンネルがありました。長さは60.1m、当時は川崎市で唯一でした。完成は1951年(昭和26年)9月。1978年(昭和53年)に取り壊され、現在のような切り通しになりました。

土木工事に用いた大型機材のない時代に、ど

んな風にトンネルを掘ったのか、工事はどのように進んだのか。地元の先輩たちが今に残してくれた写真を見ながら、皆で想像してみましよう。



第13回 史跡見学バスの旅 江戸・明治期の名園巡り

六義園・古河庭園・飛鳥山公園・旧渋沢庭園・名主の滝公園などをめぐる約4年ぶりのバス旅行です。

日時：2023年10月25日(水)

集合：8時15分 新百合丘駅北口(21ビル前)
解散：18時頃 新百合ヶ丘駅 その後柿生駅近く
募集：45名

参加費：7,500円(昼食付き)

申込：往復はがきに必要事項を記入の上、史料館まで
(必要事項)参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号

送付先：〒215-0021 川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内
柿生郷土史料館
(お近くの史料館支援委員にお渡しいただいても結構です)

申込締切：10月2日(月)

